

深ぼり！あわら市の蓮如さん伝説⑥

本願寺の主財源となった名号

大坂本願寺は名号の礼金で建立

あわら市内をはじめ、北陸、畿内、東海の門徒宅で、家宝として大切に^{まも}護られている蓮如さんの名号（「南無阿弥陀仏」など書いた紙幅の本尊）。「おれほど名号かきたる人は、日本にあるまじきぞ」（『空善聞書』）と「日本一の名号書き」を自負した蓮如さんは、1日300幅もの名号をしたためたと言われます。そのため、蓮如さんは吉崎道場と山科本願寺は門徒の志だったが、大坂本願寺は貯めていた名号の礼金で建立できた（『^{じゅうじんき}拾塵記』）と語ったそうです。名号収入が、本願寺の財政をいかに支えたかを象徴する話です。

また、蓮如さんは求めるすべての門徒に本尊をできるだけ早く、大量に下付するため、新たな作戦に出ます。それは、親鸞^{かいしよ}聖人以来の楷書体や行書体を取りやめ、よりスピーディーに揮毫できる草書体を採用したことです。中には走り書きとも思える名号も存在しますが、力強い筆圧から蓮如さんのほとばしる情熱が伝わってきます。

名号の法礼額は？

では、蓮如さんの名号の法礼はいくらだったのでしょうか。残念ながら史料に具体的な金額は残っておらず、傍証からその法礼額を推察するしかありません。

近江湖西^{こせいかただ}の堅田（大津市）にある有力末寺、本福寺の『本福寺門徒記』によると、近江大津の道場主、法覚の孫になる太郎九郎が蓮如さんの十字名号1幅を、近江の他の道場に800文（96,000円）で売り、その後、本福寺が買い戻したとの記録があります。また、他宗では日蓮曼荼羅が約1貫文（12万円）、天神神号は30文（36,000円）、阿弥陀如来木像が2貫文（24万円）だったそうです（大喜直彦『中世びとの信仰社会』）。1貫は、当時の成人男性の米扶持^{ふち}2年分とほぼ同額で、この十字名号の取引額は、男性1人が食べる2年分の米の値段に近かったのです。

飢饉が続く当時であって決して安価とは言えませんが、貧しい門徒たちも講で布施を出し合い、共同ならば求められたでしょう。近江、北陸時代における蓮如さんの名号の布施は、他宗の相場からしても平均して1貫文前後だったのではとされています。

最も多い名号伝説

北陸の蓮如さん伝説では、名号を取り上げた内容が最も多く残っています。有名なの

が、毛筆の代わりに蓮如さんが植物の根等を用い、名号を書いた筆草の話です。これはカヤツリ草科のこうぼう麦の根や、砂浜に自生して食用にもなるハマボウフウで、他につくし、鷹の羽、藤のつる、麻殻も蓮如さんは筆替わりにしました。

蓮如さんは、老若男女や貴賤を問わず、幅広い階級、職種に名号を下付しました。また、紙の代わりに手ぬぐい、笹の葉、アワビの貝殻を用いたエピソードや、むしろの上で書いたことから文字がかすれてトラの尾の模様に似ている「虎斑^{とらふ}の名号」も各地に点在しています。紙や筆がなくても名号をしたため、本願寺教勢拡大の重要なコンテンツにしていたことを物語る伝承です。

名号で異界の者を済度する話も少なくありません。蓮如さんに帰依した加賀の与八が毎晩、善性寺（金沢市）へ参ることを浮気と勘違いした女房は嫉妬のあまり、狂い死にしました。すると、女房が夜な夜な恐ろしい姿で墓から現れ、村人を苦しめます。相談を受けた蓮如さんは名号を授けて墓前で読経したところ、女房の幽霊は現れなくなり、与八に夢で蓮如さんによって救われた礼を伝えました。これ以来、真宗門徒の墓には「南無阿弥陀仏」を刻むようになったそうです。



聖徳太子の使いの託宣で大坂本願寺を建立する蓮如さん（津村別院蔵）